

座談会  
エコ×エネ体験ツアー火力編を語る



【出席者】(敬称略)

電源開発(株) 秘書広報部 広報室 業務推進役

電源開発(株) 秘書広報部 広報室課長

電源開発(株) 磯子火力発電所 ISOGO エネルギープラザ館長

電源開発(株) 磯子火力発電所発電グループ

サイエンス・カクテル

サイエンス・カクテル

藤木 勇光  
小西 金平  
浅野 勲  
勢旗 大志  
小寺 昭彦  
岩城 邦典

(聞き手) 本誌編集長 堀越 雅明

社内外の知見やノウハウを融合させたプログラム

ていただきたいと思っています。

藤木 私は「エコ×エネ体験プログラム」のスタート時点から、企画運営の全般に携わってきました。スタッフや参加者からは「キャップ」の愛称で呼ばれています。「火力編」につきましても、キャップとして全体調整に関わっています。

「エコ×エネ体験ツアー火力編@磯子大学生ツアー」は、2013年に第1回目を開催しました。その後、14年は磯子火力発電所で大規模な改良工事があり、実施を見合わせました。2回目となった今回は、前回の開催内容をベースにしました。広報室のメンバーが代わり、いくつかの新しい要素が加味されました。

広報室の新しいメンバーは、この

定着したJ-POWERの社会貢献活動  
座談会 エコ×エネ体験ツアー火力編を語る

——J-POWER(電源開発)では、2007年から社会貢献活動の一環として、「エコ×エネ体験プロジェクト」をスタートさせました。小学生の親子や大学生を対象にした体験型のエネルギー環境プログラムで、奥只見発電所など山間地域にある水力発電所が舞台でした。そして、2013年からは都市近郊の火力発電所(磯子火力発電所)を舞台に加えて、2本柱で活動を展開

しています。一方、プロジェクトに参加した学生などを対象に、世代を超えて環境とエネルギーを話し合う「エコ×エネ・カフェ」を東京で開催するなど、プロジェクト全体に縦糸と横糸を通すように活動を深化させ、来年で10年目を迎えられる。

本日は、今年2月に開催された「エコ×エネ体験ツアー火力編@磯子大学生ツアー」の企画運営に携

わった皆さんにお集まりいただきました。第2回目となった「火力編」の内容を振り返っていただきながら、「エコ×エネ体験プログラム」の進化の一端をご紹介いただきたいと思っています。「火力編」では、本店の広報室とともに、磯子火力発電所、サイエンス・カクテルが協働しているわけですが、それぞれの皆さんはどのような役割を担ったのですか。まずはその辺りから口火を切っ



藤木勇光 審議役

磯子火力発電所に1年間勤務していました。そうした関係から、「本店広報」の立場で学生たちに見せたいことと、「発電所」の側で見せたいことの調整に力を入れました。また、入社が技術系ですので、技術系の知見も活かせるよう、企画や運営に臨みました。

座談会にも出席している小西君です。彼の前の職場は磯子火力発電所であったことから、本店と発電所との関係を密にし、発電所側の意向を多く反映できるように働きかけてもっていました。また、後ほど話題に上がるでしょうが、今回はサイエンス・カクテルさんに見学用の電子ブックを作成してもらうなどの工夫も織り込みました。

### 磯子火力が訴求したい世界最高水準の環境技術

**小西** 紹介してもらいましたように、私は広報室に異動になる前は、

**浅野** 見せたいところの一番は、やはり磯子火力発電所を持つ、世界最高の環境技術でしょうね。私は発電所内にある「ISOGOエネルギープラザ」というPR館の館長ですが、そうした面が重要な訴求対象だと認識しています。ちなみに、私は昨年の11月に異動したのですが、驚くのはこの発電所の見学者数です。東京から近距離ということもあり、各界各層の皆さんが連日お越しになります。

**藤木** 国会議員や産業界のトップ、また海外からの見学者も多いです

ね。「クリーン・コール・テクノロジ」の最先端プラントで、環境性にとっても優れ、海外へのプラント輸出の期待も高まっています。実物をぜひ見たいという皆さんが多いのでしようね。

**勢積** ツアーに参加された学生も、まずそうしたところに興味を強く持つていたようでした。私は、今回の「火力編」で学生に発電所構内を見学してもらったときの現場ガイド役を務めました。具体的には、2日目の「発電所の設備を巡る」と題するプログラムで、コースを「石炭」「水」「空気」の3コースに分け、そのうちの「空気コース」の案内を担当しました。

### サイエンス・カクテルとの協働

**小寺** 遡ると、J-POWERさんから、「火力編」実施のプランをお

聞き直したのが2010年の暮れでした。以来、サイエンス・カクテルは、プログラム作成や当日の運営に参画し、今回で2回目のツアー実施となりました。

「エコ×エネ体験ツアー火力編@磯子大学生ツアー」の実施方法として、大きな特徴は「協働」である点です。J-POWERさんは、社会貢献活動で豊富な知識と経験をお持ちですが、我々「サイエンス・カクテル」が参画することで、活動の視点を複眼的にしたり、コミュニケーションの深化を図れる面が期待されていると認識してい

ます。

また、J-POWERさんの社会貢献活動は「環境」が大きなキーワードの一つです。ですから、今回のように磯子火力発電所をプログラムの舞台にする場合には、「環境」を技術的な側面で紹介することが重要な要素です。「サイエンス・カクテル」の専門性は科学技術コミュニケーションにあるので、様々なツールを用いたり、専門的な話題を当事者と丁寧にコミュニケーションする場を設定したり、そうした場で対話を促進するコミュニケーションを担うことなどを通じてコミュニケーションを推進することが私たちの立ち位置だと思っています。

加えて私たちは、長期的な軸をもつてプログラムの作成に携わっています。企業は担当者が変わる可能性があります。私たちのメンバーは専門集団として、継続的な知見やノ

ウハウを提供できる強みがあると思っています。

ちなみに「サイエンス・カクテル」の中で私の役割ですが、「火力編」のプログラムでは、企画全体の進行役を務めています。実施プログラムの企画検討は、メンバー全員が対等に智慧を絞りますが、それと共に「進行役」を担っているわけです。実は私は「サイエンス・カクテル」のメンバーの中でも、唯一、プラント実務の現場経験をもつていますので、その経験を「進行役」としての強みにしていければ良いと考えています。

**岩城** 私も「サイエンス・カクテル」のメンバーとして、プログラム作成やコミュニケーション役など当日の運営に関わっていますが、それ以外にもツールの開発を担っています。例えば、第1回目の「火力編」では、「エネルギー大臣になる

## 座談会 エコ×エネ体験ツアー火力編を語る



小西金平 課長

## 座談会 エコ×エネ体験ツアー火力編を語る



勢旗大志氏

**小西** 磯子火力発電所の微粉炭焚き石炭火力発電技術は世界最高水準です。現場の生の声としては、「営業用プラントの技術で世界トップランナーであることをぜひ感じてほしい」という要望があり、そこを重要なキーワードにしました。  
加えて、私は石炭技術に関連して、その将来技術であるIGCC（石炭ガス化複合発電）やIGFC（石炭ガス化燃料電池複合発電）なども知ってほしいと考えました。私自身が磯子火力発電所や当社研究所で将来の石炭技術研究に携わった経験があり、その説明役としての強み



浅野 勲館長

うー」というカードゲームのデザインやゲームを補助するツール、具体的にはiPad用電子ブック「エネルギー大臣になろう！GameBook」の開発をしました。この電子ブックは、「エネルギー大臣になろう！」のルールや関連する資料が掲載されている他、計算シミュレーション機能を持ち、ゲームがより簡単に、試行錯誤して遊べる仕組みになっています。  
そして第2回目となった今回は、磯子火力発電所の立体マップ機能を搭載した電子ブック「磯子ガイドブック」を作りました。

### iPad活用など新たな工夫を追加

——いまお話しがあった「磯子ガイドブック」は興味深いですね。後ほど詳しくご紹介をお願いします。まず、全体的なところから、第2回目の「火力編」ではどのような点に力を入れましたか。

### プログラムの主体にした「現場体験」

**藤木** 全体としては、どちらかという技術寄りのプロモーションに仕上げました。まず、ツアーに参加する学生募集の際に、従来の方法にプラスして、エネルギー学会の学会誌でPRをしました。しかし、かと言ってエネルギー分野に関心のある学生ばかりにターゲットを絞ったわけではなく、今まで関係のあった大学の先生にお声掛けしたり、イベン

もあったからです。

### 伝える情報は生きたまままで

——私も取材で2日目に磯子火力発電所にお邪魔しました。発電所見学のプログラムでは、3班に分かれて構内を見学し、その内容を学生が発表。その後、小西さんがIGCCやIGFCなどの将来技術をレクチャーしました。プログラムとして円滑な繋がりがあり、とてもよく段取りされていると思いましたね。

**小西** 準備の段階では、専門分野にどこまで踏み込むかが悩みでした。ほかのメンバーからは、「専門的に全てを理解してもらえなくてもイメージを掴んでもらえば良いのでは」というアドバイスもあって、そのようにしました。丁寧に噛み砕いて説明することも大切ですが、やや専門的なまま投げ込んで反応を見た

トで知り合った大学生たちに直接アプローチするなど、積極的な募集活動を行いました。その結果からか、今回は美術大学の学生も参加してくれました。

またプログラム内容の面でも、若干ではありますが技術の訴求を重視し、前回の内容に変更を加えました。具体的には、現場体験に時間を割きたいと考え、前回で人気のあった「横浜港ナイトクルーズ」を思い切って割愛しました。このクルーズでは、海上の船から都市や工場の夜景を眺めて、エネルギーが人々の生活や産業活動を常に支え続けていることを感じてもらうことに狙いがありました。今回は、磯子火力発電所を見学後に、発電所の若い社員と学生が質疑応答や交流をして、エネルギーの生産現場の社員の生の声を感じ取ってもらうことを重視したわけです。

わけです（笑）。

**藤木** 表現を変えれば「情報を活きたまま」伝えたわけです（笑）。

**勢旗** 伝え方というのは難しいですね。私は現場でガイド役を務めたので、まず発電所のリアルな雰囲気やいかにか伝えるかを考えました。たくさん機器を見てもらうことも一つですが、あえて雰囲気を感じ取りやすい箇所を選んでコースに組み込むようにしました。もちろん、発電所の役割として重要な機器は、外見から見えづらい状態であっても、その雰囲気を掴めるように配慮しました。そして、説明はできるだけシンプルに、専門用語は極力避けて日常的な会話の言葉で伝えるようにしました。

### 焼き肉に例えてポイントの配気の流れを解説

**藤木** 勢旗君は発電所の空気の流れ

## 座談会 エコ×エネ体験ツアー火力編を語る



岩城邦典氏

ることは困難でした。本来このような機能はアプリとして作る事が一般的です。しかし、iPad用アプリは、改定・流通するのにもアップル社の認証が必要で時間がかかる問題がありました。ところが今回の「火力編」の数ヶ月前にiOSのメジャーアップデートがあり、WEB3Dという立体表示の規格が電子ブック内でも使えるようになりました。電子ブックであればアップル社の認証も必要ありませんし、ツアー中でも改定・追記・配布できます。また、作るのには電子ブックデータの部分だけです、プレイヤーの開

発が必要ない分、開発コストも格段に低く抑えられます。そのような理由から「礫子ガイドブック」はアプリソフトではなく電子ブックで作ることにしました。当初、機能としてのアイデアはたくさんあったのですが、今回は核心機能である「俯瞰」をどれだけ使えるものにするかに注力することになりました。現場では、安全性確保のため、iPadをストラップ付きのケースに入れ、導電性の軍手で操作してもらいます。そのような利用シーンでは、細かい操作や複雑な操作はトラブルの元になったり使えない機能になったりするので、そういった実際的でない機能をそぎ落としてシンプルにしていこうという事情もあります。今回の「火力編」で、ハード面や運用面で「可能なこと」「避けたほうがいいこと」が見えてきましたので、次回以降は、そ

れに沿った「シンプルで使える機能」をさらに追加していけたらと思っています。  
**小寺** 「火力編」で電子ブックを現場に持ち込むことを検討したとき、最初に危惧されたのが安全確保でした。iPadの操作で両手がふさがったり、iPadを見て注意が怠ったりしないかという心配です。また、現場で期待どおりに作動するかどうかも、本番まで気がかりでした。  
しかし、礫子火力発電所の現場では、社員の皆さんが設備巡視などのときに、すでにiPadなどを活用しているそうです（笑）。それを聞いてハードルが少し下がりました。  
**iPadで撮影した構内の写真を学生同士で共有化**  
**小西** 礫子火力発電所の現場では、関係部署が互いの情報を共有するた

を、焼き肉料理のコツに例えて説明していましたね。  
**勢積** 発電所見学の前日ですね。学生たちに「空気コース」の事前レクチャーをした際に、空気の役割を焼き肉の火加減に例えたわけです。石炭を発電所で焚くのも一緒で、要は火加減で、そのために空気の量をうまく調整することが重要ですよ（会場笑）。  
——勢積さんが携わった「空気コース」では、過去にトラブルがあった機器の前で、その原因と対策を説明されましたね。学生たちはそのリアルさに目の色が変わったようでした。



小寺昭彦氏

た。  
**勢積** 設備トラブルの詳細情報に関して、敢えて学生に説明する事については賛否両論ありました。しかし、大きな金属の固まりのような設備が、どれほどのエネルギーで動いているかを感じてもらい、またそのスケールを知ってもらえる、またとない機会だと思いましたが、可能な限り詳しい説明ができる様に社内調整を行いました。最終的には了承されたので、当日はその機器の前でトラブル発生直後の状況写真を見せながら説明する事ができました。  
**小西** 自分たちの肌感覚を学生たちに話した方が、説得力があるし、興味も深まりますからね。  
**発電所俯瞰のツールとして「礫子ガイドブック」を開発**  
——今回のプログラムでは「礫子ガイドブック」の存在が光ったよう

ですね。  
**岩城** 「礫子ガイドブック」を作成したきっかけは、前回の参加者からの「発電所のどこにいるのか分からなくなってしまう」という声でした。発電所の構内は広くて複雑なので、初めての人は位置を認識しづらい。そこで、発電所を俯瞰するツールを作ることにしたのです。  
コンセプトとして考えたのは持ち歩けるジオラマ模型です。「礫子ガイドブック」では、立体表示された建物を透過して、石炭や空気・水に関するそれぞれの管や装置がどのようにつながっているのか、今自分が見ている場所はどこなのか、構内を実際に歩くような感覚で見ることが出来ます。表示されている各種装置をタッチすると写真や仕組み図など関連資料を見ることが出来ます。  
当初はiPadの電子ブック内で、自由な立体表現に機能を持たせ

座談会  
エコ×エネ体験ツアー火力編を語る



ボイラーで石炭が燃える様子を確認

た、苦労話はありませんか。  
小西 苦労話はありませんね。ツアーの初日のプログラムで、ガスコンロを使って石炭の生焚き試験をしました。苦労話はありませんか。ツアーの初日のプログラムで、ガスコンロを使って石炭の生焚き試験をしました。つわる実体験をした上で、翌日に発電所を見学し、煙も煤も匂いも出していないことを実感してもらおうというわけです。しかし、たとえ小さな石炭を燃やすとは言っても、火災予防条例の事前の届け出が必要かもしれません。そこで、何度も条例内容を確認しましたし、何度も地元消防署にも相談しました。その結果、当日の電話による開始／終了の連絡を入れることを条件に届出なしでかまわないというお達しがあり、社内のコンプライアンスを遵守しつつ、生

焚き試験が可能になりました。私自身、石炭の扱いがいかに難しいかを、手続き面も含めて改めて認識しました(笑)。  
**石炭の生焚き試験が「火力編」の原点**  
藤木 実は「エコ×エネ体験ツアー」の「火力編」を発想した原点が「石炭の生焚き」だったのです。日本の電気の25%以上を支えている石炭ですが、我々の生活の場で燃やすことはなくなりました。煙や煤が多く出て、生活圏では使用がもはや困難です。そうした現実がある一方で、石炭というエネルギー素材をぜひ見せたい。しかも、発電所ではクリーンに利用している実態を、ギャップを感じさせながらも見せたかったので。  
浅野 私の父は福島県にかつてあった常磐炭坑で働いていました。石炭

た、苦労話はありませんか。  
小西 苦労話はありませんね。ツアーの初日のプログラムで、ガスコンロを使って石炭の生焚き試験をしました。

た。石炭は意外に火がつきにくく、火がつくと、もうもうと煤が出て、匂いもきついことを実感してもらおうことが狙いです。そうした石炭にま

例えば今回も、社会的に重要なブランドには、情報管理や安全管理の面で規制やコントロールが必要なのを理解してもらうために、敢えて写

浅野 話は少し戻りますが、学生の安全確保には大変気を遣いましたね。「火力編」は、一般見学用コース以外の場所にも入ることになりました。社員にとっては日常の巡視路

めに、最近、iPadを活用し始めています。設備状況のデータをiPadの画面を通じて確認したり、iPadで現場の写真を撮影して運転員が操作室で確認したりという活用です。  
今回「火力編」でも、学生たちが発表用の写真を撮って、それを互いに共有するといった活用も併せてしました。  
小寺 発電所内には知財やセキュリティの面から写真撮影が制限される設備や機器があります。一方、「サイエンス・カクテル」のプログラム手法では、主体的な気づきを促すために、逆に「制限」という実情を活かす手法を取り入れることがあります。



J-POWER社員のユニフォームに身を包む。この日一日はJ-POWERの社員になりきる。



PR館のミニチュア模型で礫子火力発電所の機能や役割を鳥瞰

で、特別危険なことではないのですが、念を入れてヘルメットや安全帯、安全靴、防塵マスクを着用してもらいました。

**石炭の生焚き試験などで苦勞**

今回の「火力編」での手応えをどのように感じていますか。ま

## 座談会 エコ×エネ体験ツアー火力編を語る



実際の設備を間近に見られるのがこのツアーの醍醐味（写真は「空気の流れコース」）

からみると、電子ブックの可能性はさらに広がると思います。  
**藤木** 「火力編」では、いわゆる設備や技術などハード面の紹介や解説だけでなく「発電所」という実業の場やその雰囲気や学生たちへの感じ取ってほしいと思っていました。それを勢籙君たち若い現場社員が、自分の言葉で伝えてくれましたね。

良く準備をしてくれたと思ってます。

**岩城** 電子ブックでは、「現場での語り」を重視して、文章的な説明は最低限に留めています。電子ブックに全ての解説や答えが書いてあると、そればかりを見て終わってしまう心配もありました。せつかく本物を見て、現場の人から話を聞ける貴重なツアーなのに、それではもったいない。そうではなく、写真や図などを見て、説明や会話が膨らむ「きっかけツール」にしたいと思っています。

### 学生だけでなくスタッフ側も気づきを得る

**小寺** こうした取り組みでは、参加する学生だけでなく、我々スタッフ側にも気づきがありますね。そしてトータルとして、コミュニケーションが深化していく。そんな手応えを



午前中はテーマ別に3つの班に分かれて発電所構内を見学（写真は「空気の流れコース」の参加者）

### 電子ブックを使って現場での語りを充実

**岩城** 苦労話と言うことでは、開発側よりもガイドの皆さん側で、「どのように活用するか」の悩みや苦労があったのではないのでしょうか。自分の中では「私がガイド役なら、こういう機能があると便利！」と想像しながら開発したものの、現場でどのように活用するかは、ガイド役の

皆さんに大いに委ねていましたので。

**勢籙** 正直言いますと、とてもプレッシャーを受けました（会場笑）。技術的にとても完成度の高いものに仕上がっていましたからね。ガイド役として準備をしている段階では、常に電子ブックのことが念頭にありました。

そして、私の場合は、コースを改めて絞り込んで、電子ブックを通じて説明の機会を持てるよう、時間的な余裕を持つようにしました。iPadを歩きながら見るのではなく、ポイント解説のために立ち止まったときに操作してもらえよう配慮したわけです。私の場合の配慮や工夫はささやかでしたが、今後の運用面

強く感じています。

**藤木** 今回は、本店広報室・サイエンス・カクテル・磯子火力発電所の3者が互いに連携して実施しました。新たな気づきも色々ありましたね。

### 第3回の開催に向けていかに磨きを掛けていくか

「エコ×エネ体験ツアー火力編@磯子大学生ツアー」は、来年以降の実施に向けて、どのように磨きを掛けていかれますか。

**小西** まず実務的なところでは、「火力編」をはじめ当社の「エコ×エネ体験プロジェクト」を、広く学生たちに周知していくことが一つあります。また、プログラム内容では、フォーカスの仕方に磨きをかけたいですね。今回のように、参加者が美大から理系の大学院まで幅広い学生たちだと、どう絞り込むか悩ま

しい面もありますが、いろいろ試行錯誤していきたいと思います。

## 新たにエンジニアリングも包含したプログラムを提供

**藤木** 私は「多様性」を大事にして磨きを掛けたいと思っています。「エコ×エネ体験プロジェクト」の重要なキーワードの一つは「学び合いです」。それは、私たちが学生に何かを教えるという意味ではなく、私たちも学生（参加者）から学ぶことがたくさんあるということですし、さらに、学生たちは文系と理系が交ざって、コミュニケーションを深めながら互いに学び合っています。そうした多様な関係性を作っていくことがとても大事であり、またそれが「エコ×エネ体験プロジェクト」の魅力であるはずなんです。

そして、今後は「エコ」と「エネ」に加えて、「エンジニアリング」

をも包含したプログラムの提供を追究していく考えです。

**小寺** たしかに、学生も我々も、互いに教え合い、学び合えるところが「エコ×エネ」の魅力ですね。

第2回の「火力編」では、トライアルとしてプログラムに新しい要素をいくつか織り込みました。今後はそうした内容の統一性などにも目を向け、活動としてさらに進化させていきたいですね。

## 電子ブックをツアー終了後のコミュニケーションにも活用

**岩城** 「礫子ガイドブック」の今後ですが、自分が巨大な装置の中のことを見ているのか、という「俯瞰」の要望に対しては、ある程度応えられたと思っています。しかし、目で見ることのできない内部の動き、例えば石炭や空気・水が、管や装置の中でどのように変化していくのか、

また流れていくのかを動画を交えて表示するなど、言葉だけではイメージが湧きにくい部分を補足する工夫に、まだまだ改善の余地はあると思っています。

それから、現場見学のツールとしてだけではなく、その後も活用できるツールにしたいという思いもあります。例えば、コミュニケーション機能を搭載して、参加者の交流を促進させるツール機能の充実もやりたいところです。今回は、ツアー中に撮影した写真にコメントを付けて、参加者間でツアーの後も共有してもらっています。

「電子ブック」というと、紙の書籍を電子化したものというイメージがありますが、実際には文字情報を超えて様々な仕組みをそなえた総合ツールにできます。「礫子ガイドブック」は、見れば答えが書いてある書籍ではなくて、議論や気づきを

促すためのツールであることを基本的な狙いとして作成してみました。紙にはない「電子ブック」であることとの強みはそういうところにあると思っています。J-POWERさんの「エコ×エネ体験プロジェクト」には、ツアー参加者などを対象にした「エコ×エネ・カフェ」などのコミュニケーションの場もあります。できれば、そうした場でも活用できるツールになると良いですね。

## 社外を含めた協働でのプロセスを今後も重視

——発電所の側から参加した浅野さんと勢籬さんは、今回の経験を今度どう活かそうでしょうか。

**勢籬** 今回のガイド役で、学生たちに発電所のスケール感などは伝えることができたと思っています。しかし、私たちが発電所でどんな業務に従事しているかなど、わかりや

すく説明するということでは、やや不十分であったような気がしています。多分それは、私自身が一般の人たちの視点や認識に対して端的に訴えかけられる程、自らの業務のエッセンスを掴みきれないからではないかと思うのです。もともと、相手の腑に落ちるような説明ができるように研鑽を積みみたいと思っています。

**浅野** PR館としても、今回のようなプログラムには引き続き協力していきたいと思っています。また、開発した電子ブックのようなツールを日常の運営などに活かしていきたいですね。

**藤木** 電気は私たちが暮らしていくために、産業活動をしていくためにも必要なエネルギーです。それを「自分ごと」としてどう捉えていくのか。そうした問題意識を促すことが「エコ×エネ体験プログラム」の

大きな狙いの一つでもあります。しかも、白黒をはっきりさせるような二項対立ではなく、複合的かつ広い視野をもちながら、より良い解を求めていく働きかけが大切だと思っています。そのために、私たちの社会貢献活動は、サイエンス・カクテルさんのような社外の皆さんと対話を重ね、気づきを得ながら活動してきました。そのプロセスは今後も大事にしていきたいと思っています。

——「エコ×エネ体験プログラム」も来年には10年の節目となり、「水力編」の都心版として生まれた「火力編」も3年目となってさらに軌道に乗っていきのどと思います。様々なアイデアが豊富に織り込まれた素晴らしい社会貢献活動です。今後も新たな智慧を織り込みながら実績を重ねてほしいと思います。本日はお忙しい中お話をいただきありがとうございます。